

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和7年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第4号（7月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理，安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期，適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守） |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川，湖沼，海等への汚染防止）
（養蚕，養蜂等への危被害防止） |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和7年度 病虫害発生予報 第4号

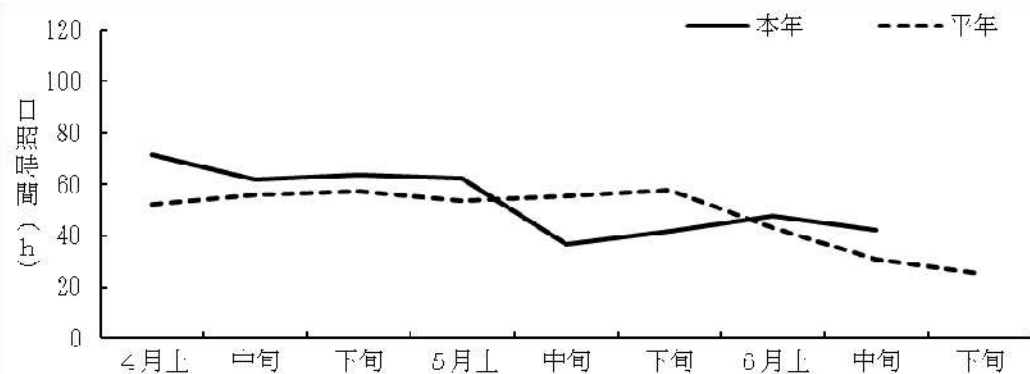
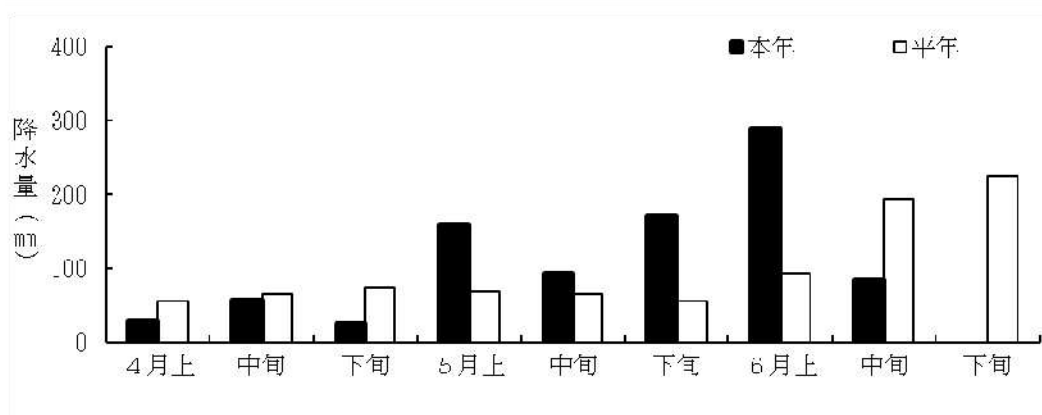
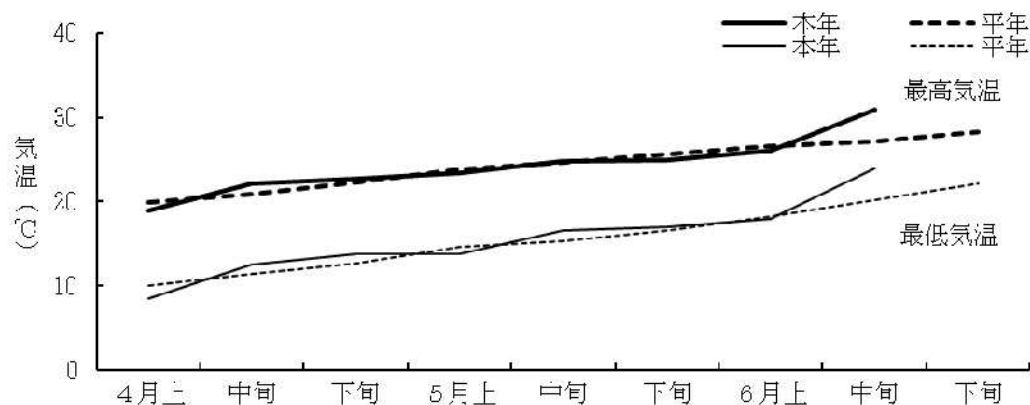
令和7年6月27日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（6月28日から7月27日） 令和7年6月26日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率(%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	10	80	気温は九州南部、奄美地域共に高い、降水量は九州南部は平年並か少ない、奄美地域はほぼ平年並、日照時間は九州南部は多く、奄美地域はほぼ平年並。
	奄美地方	10	20	70	
降水量	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	10	30	60	
	奄美地方	30	40	30	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稻	いもち病（穂いもち）	やや少	やや少
		斑点米カメムシ類	やや少	やや少
野菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	やや多	並
		炭疽病	やや少	並
		ハダニ類	やや多	多
	サトイモ	疫病	やや少	やや少
	野菜・花き共通	ハスモンヨトウ	やや少～多	多
花き	キク（施設）	白さび病（県本土，施設）	多	やや多
		ハダニ類（県本土，施設）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや少	並
果樹	カンキツ	そうか病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		輪斑病	やや多	やや多
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	並	やや多
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	並	並

I. 普通作物

1. 早期水稻



- (1) いもち病（穂いもち，令和7年度技術情報第6号，6月4日付参照）

ア 予報内容

（ア）発生地域 県内全域

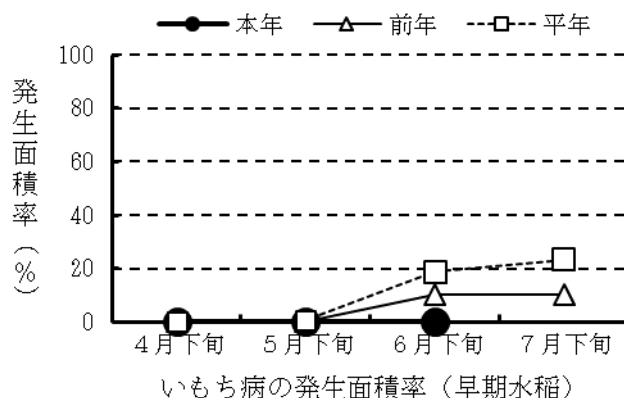
（イ）発生量 やや少

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

葉いもちの発生面積率0%（平成19%）

：やや低い



ウ 防除上注意すべき事項

（ア）ほ場を見回り，葉いもちの発生を確認する。ほ場の中心など湿度の高い場所で坪状に発生していることもあるので注意する。

（イ）葉いもちの発生ほ場及びその周辺ほ場では，なつほのかなど晩生の品種で穂ばらみ期から穂ぞろい期に，液剤または粉剤により，穂いもちの防除を実施する。

- (2) 斑点米カメムシ類（令和7年度技術情報第5号，6月4日付参照）

（アカスジカスミカメ，クモヘリカメムシ等）



ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生時期 出穂期以降

（ウ）発生量 やや少

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

捕獲箇所率57.7%（平成73.7%）：低い

平均捕獲虫数2.8頭（平成6.9頭）：少

発生程度の高い箇所が認められる（+）

（イ）県全体における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合は，中程度以上が6.0%（平成：14.7%）と平成より低かった（表1，図）。

（ウ）種別構成比はアカスジカスミカメが52.4%と最も高く，次いでクモヘリカメムシ，ホソハリカメムシ，シラホシカメムシの順であった（表2）。なお，南薩での中発生はアカスジカスミカメの捕獲虫数によるものであった（表1，2）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）斑点米カメムシ類による斑点米の混入は米の検査等級格下げにつながり，特に早期水稻では品質低下の主要因となる。

（イ）毎年斑点米被害が多い地域では，穂揃期と穂揃期の7～10日後（乳熟後期）の2回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生には十分注意する。

（ウ）防除は農薬の使用基準を遵守し，農薬がほ場外に飛散しないようにする。

表1 早期水稻周辺のイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の地域別、発生状況
(令和7年6月2日)

地 域	調 査 箇所数	捕 獲 ^{注1)} 箇所率(%)	平 均 捕獲虫数	程 度 別 発 生 箇 所 割 合(%) ^{注3)}					中以上の 発生割合
				甚	多	中	少	無	
南 薩	24	79.2	4.9	0.0	0.0	13.0	67.0	20.0	13.0
大 隅	28	39.3	0.9	0.0	0.0	0.0	39.0	61.0	0.0
県全体	52	57.7	2.8	0.0	0.0	6.0	52.0	42.0	6.0
県全体 ^{注2)}		73.7	6.9	0.5	2.2	12.0	59.9	25.4	14.7

注1) 捕獲箇所率(%)＝捕獲箇所数/調査箇所数×100、注2) 平年は過去5か年(令和2年～6年)の平均値、
注3) すくい取り調査(捕虫網20回振り)の捕獲虫数を基準とし、甚:61頭以上、多:60～31頭、中:30～11頭、少:10～1頭、無:0頭とした。

表2 早期水稻周辺のイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の地域別、種類別捕獲状況
(令和7年6月2日)

地 域	調 査 箇所数	項 目	クモヘリ カメムシ	ホリハリ カメムシ	ミナミアオ カメムシ	シラホシ カメムシ	イネ カメムシ	アカシジ カスミカメ	合 計
南 薩	24	平均捕獲虫数 ^{注1)}	1.3	0.7	0.0	0.0	0.0	2.9	4.9
		捕獲箇所率(%) ^{注2)}	41.7	33.3	0.0	0.0	0.0	45.8	79.2
大 隅	28	平均捕獲虫数	0.4	0.3	0.0	0.1	0.0	0.2	0.9
		捕獲箇所率(%)	17.9	17.9	0.0	3.6	0.0	14.3	39.3
県全体	52	平均捕獲虫数	0.8	0.5	0.0	0.04	0.0	1.5	2.8
		捕獲箇所率(%)	28.8	25.0	0.0	1.9	0.0	28.8	57.7
		種別構成比(%) ^{注3)}	28.0	18.2	0.0	1.4	0.0	52.4	100.0
県全体 ^{注4)}		平均捕獲虫数	2.6	0.9	0.1	0.2	0.0	3.1	6.9

注1) 平均捕獲虫数＝総捕獲虫数/調査箇所数、注2) 捕獲箇所率(%)＝捕獲箇所数/調査箇所数×100、注3) 種別構成比(%)＝捕獲虫数/総捕獲虫数×
注4) 平年は過去5か年(令和2年～6年)の平均値

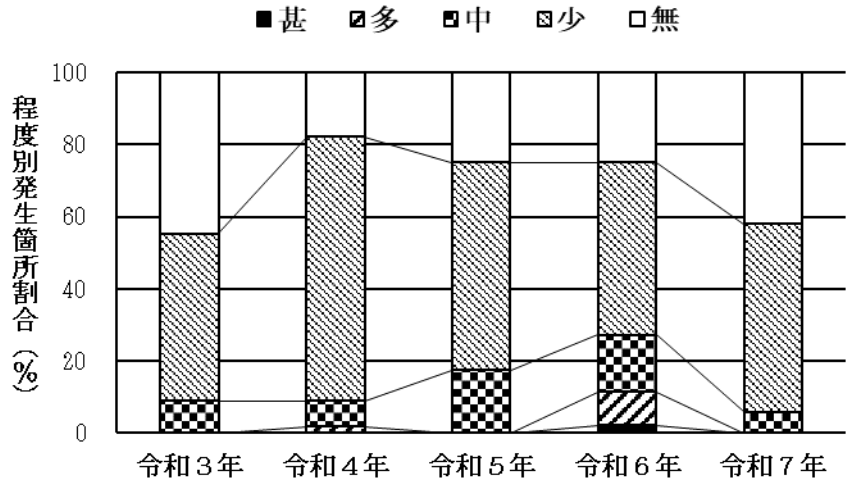


図 早期水稻周辺のイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の年次別程度別発生箇所割合（県全体）

2. 普通期水稻

(1) イネウンカ類およびコブノメイガの誘殺虫数

セジロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は5月17日（平年5月7日）で、平年より遅かった。

トビイロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は6月22日（平年6月20日）で平年並みであった。

コブノメイガ：フェロモントラップでの初誘殺日は6月4日（平年5月19日）で、平年より遅かった。

表 各種トラップでの誘殺虫数と初誘殺日（農業開発総合センター設置）

月・半旬	セジロウンカ				トビイロウンカ				コブノメイガ	
	60W予察灯		大型吸引トラップ		60W予察灯		大型吸引トラップ		フェロモントラップ	
	本年 ^{注1)}	平年 ^{注2)}	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	(平年) ^{注3)}
5・5	0	2.0	0	0.6	0	0	0	0	0	1.7
6	0	10.2	0	1.6	0	0	0	0	0	2.9
6・1	0	11.2	0	2.0	0	0.1	0	0	1	9.0
2	12	29.4	1	6.5	0	0.1	0	0	2	22.0
3	2	19.9	0	11.0	0	0.2	0	0	1	12.0
4	3	39.7	2	10.0	0	0.4	0	0	5	15.3
5	2	80.1	0	11.3	2	1.6	0	0.5	1	10.7
6		50.2		7.2		7.8		0.9		5.4
合計	19	242.7	3	50.2	2	10.2	0	1.4	10	79.0
初誘殺日	5/17	5/7	6/10	5/19	6/22	6/20	/	7/11	6/4	5/11

注1) 本年6月5半旬のデータは、6月21～23日の合算。注2) 平年は2015年～2024年の10年間の平均。注3) (平年)は2018年～2024年の7年間の平均。なお、最新の誘殺状況は、ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshu/>) を参照。

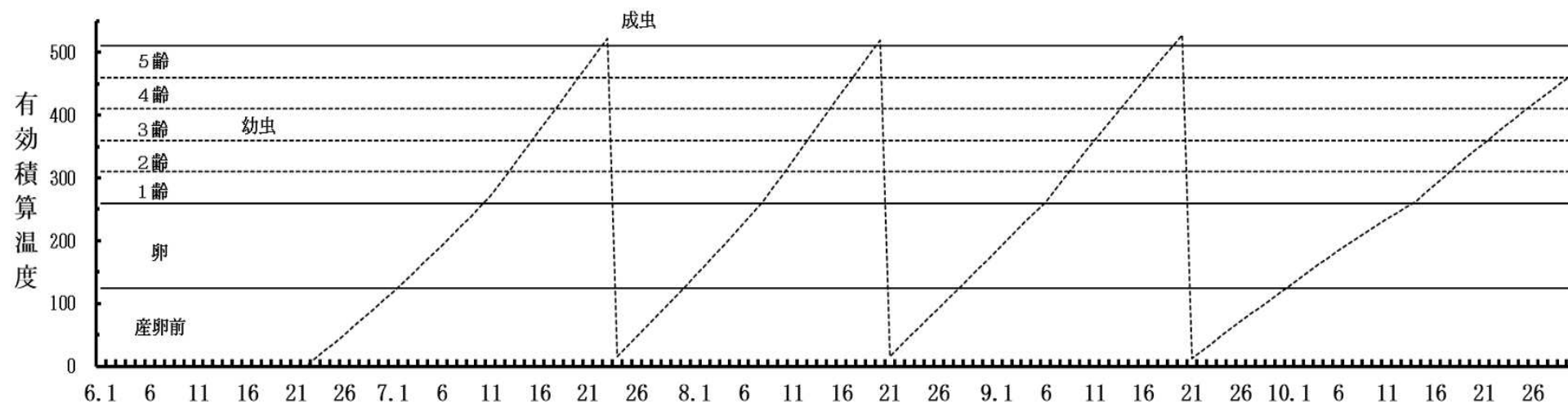


図 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図（参考）

注）金峰町の 60W 予察灯に誘殺された 6 月 22 日を起算日とした。気温は，加世田のアメダスポイントデータを利用した（6/23 以降平年値）

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）うどんこ病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 50%（平年 46%）：並

発生程度の高いほ場を認めた（+）

（イ）気象予報

気温：高い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

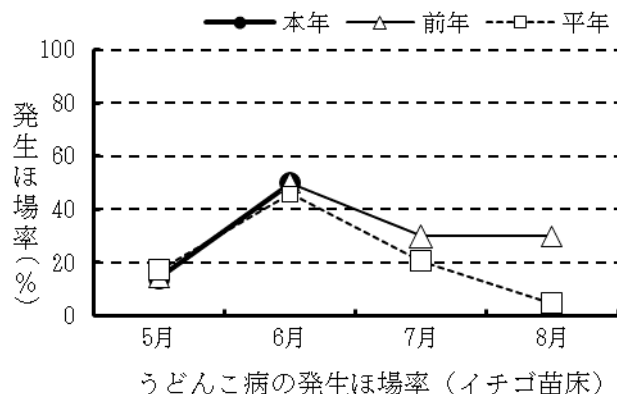
（ア）本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

（イ）雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

（ウ）発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

（エ）ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬液が十分かかるよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



（2）炭疽病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0%（平年 2%）

：やや低い

（イ）気象予報

気温：高い（+）

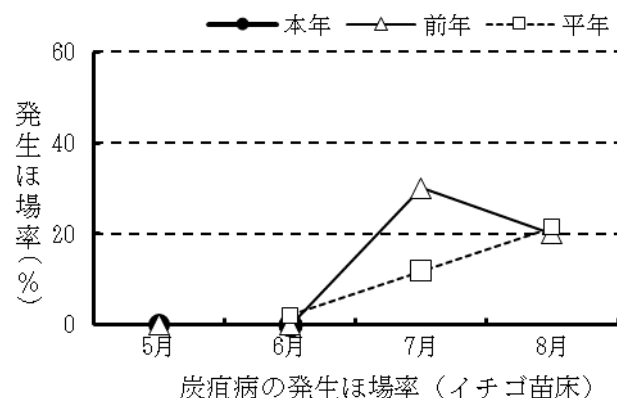
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

（イ）雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

（ウ）生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

（エ）農薬による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 70% (平年 25%)

：高い

発生程度は低い (－)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (+)

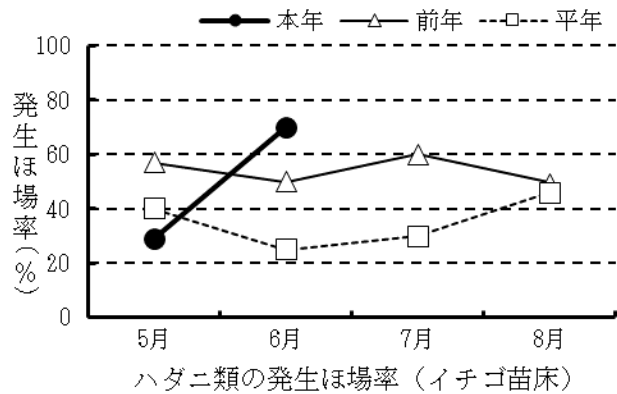
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する

(エ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 38%)

：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (－)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。

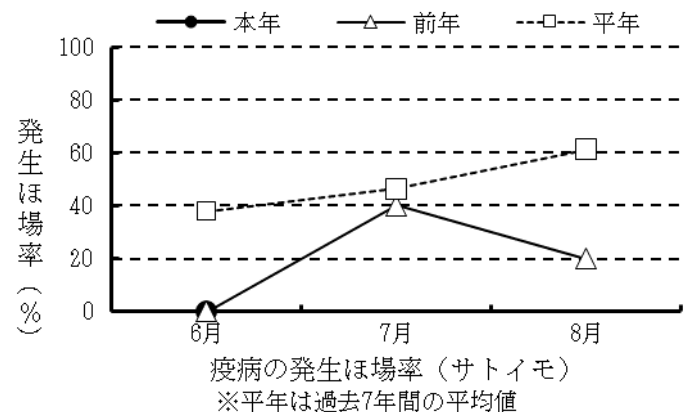
(イ) 発病茎葉は発生源となるので、摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

(ウ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発生を確認したら直ちに治療効果がある

農薬を散布する。効果的な散布方法については、令和3年度鹿児島県農業開発総合セ

ンター普及情報 (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop-tech/nenndo/documents>

/documents/97450_20220613131310-1.pdf) を参照。



3. 野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
(イ) 対象作物 イチゴ, サトイモ, キク等
(ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少～多

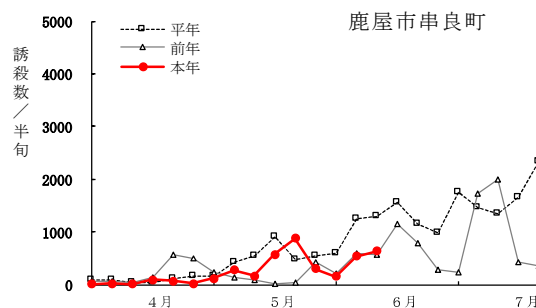
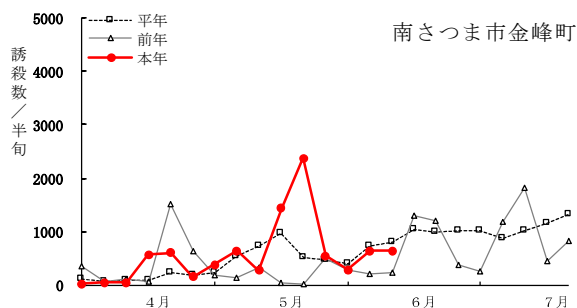
作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
イ チ ゴ	0	3	やや少
サ ト イ モ	30	10	多
キ ク	30	0	多

表 5～6月のフェロモントラップ総誘殺数

	南さつま市	鹿屋市
誘殺数 (5月1半旬～6月3半旬)	多 7,217頭 (平年5,403頭)	やや少 3,652頭 (平年6,213頭)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
(イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害(白変葉)するので、発生を目安にする。
(ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
(エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況 (南さつま市, 鹿屋市)

防除に関する今月の留意事項

1. トマトキバガ

- (1) 本種の寄主植物はトマト, ナス, ピーマン, バレイショなどのナス科植物や, マメ科のインゲンマメ等である。トマトの被害(写真参照)は、葉では内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに、食害部分の腐敗が生じ、果実品質が著しく低下する。

- (2) 本県では、誘殺数が年々増加傾向にあるものの（表），トマト等での被害は今のところ認められていない。なお，他県では被害が認められているため，注意が必要である。
- (3) 防除対策として，施設栽培ではハウスの開口部や換気部を1mm以下の目合いのネットで被覆しハウス内への侵入防止に努める。
- (4) 本種のトマト等での被害が疑われる場合は，病害虫防除所（099-245-1157）に連絡する。

表：令和6～7年度フェロモントラップによる誘殺状況

調査品目	地点		R6年度					R7年度	
			4月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
ピーマン	志布志市	No. 1	3	23	3	1	0	0	1
		No. 2	0	13	1	0	0	0	0
	東串良町	No. 1	3	10	5	0	0	0	0
		No. 2	0	9	0	0	1	0	2
トマト	霧島市	No. 1	6	14	2	0	0	0	0
		No. 2	2	8	2	0	0	0	0
バレイショ	長島町	No. 1	5	-	-	-	0	0	15
計			19	77	13	1	1	0	18

（参考）トマトキバガのトマトでの被害状況等について



幼虫の食害による被害葉



幼虫の食害による被害果



成虫：翅を閉じた状態で5～7mm
翅は灰褐色で黒色斑が散在



幼虫：終齢幼虫で約8mm
体色は淡緑色～淡赤白色
前胸の背面後縁に狭い黒色横帯

【写真提供：宮崎県病害虫防除・肥料検査センター】

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 40%（平年 9%）：高い

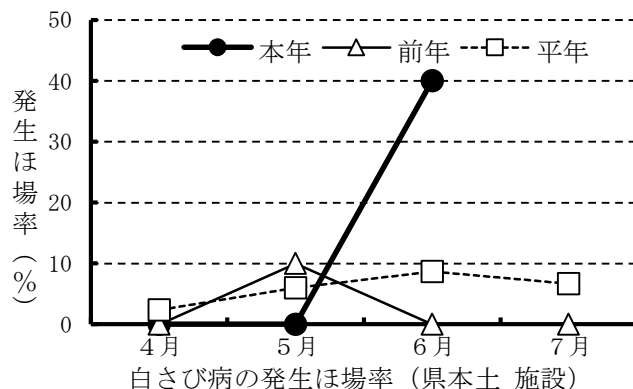
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) 母株への感染を防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 30%（平年 34%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

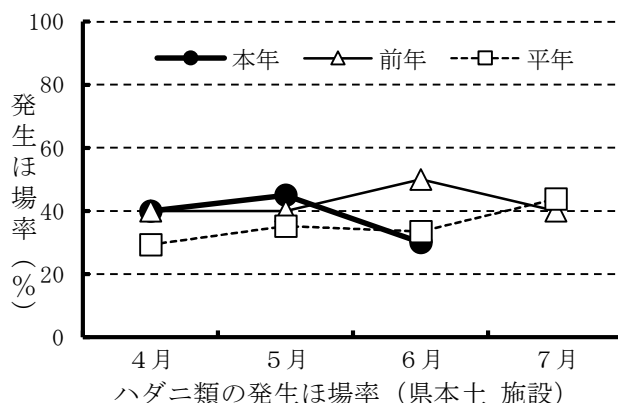
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

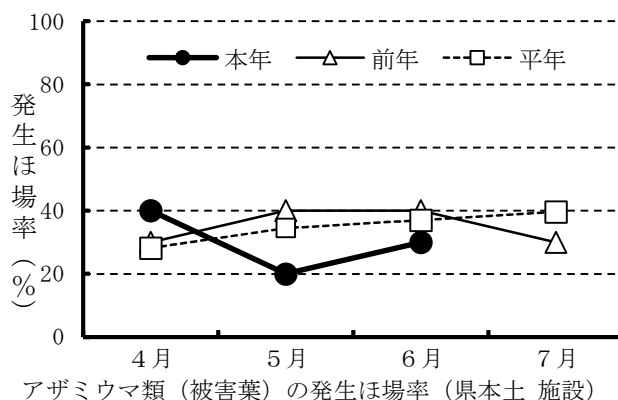
発生ほ場率 30%（平年 37%）：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの



設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

(イ) クロゲハナアザミウマは中下位葉に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） やや多

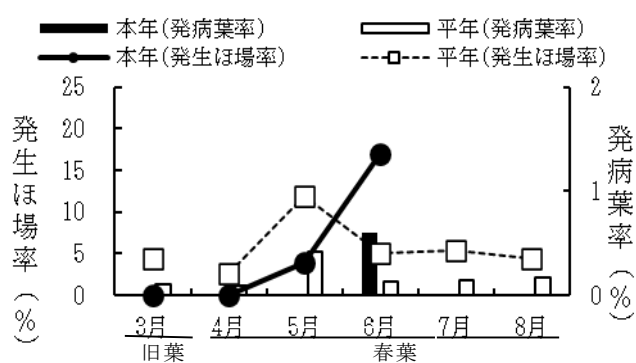
奄美地域（果実） やや少

イ 予報の根拠

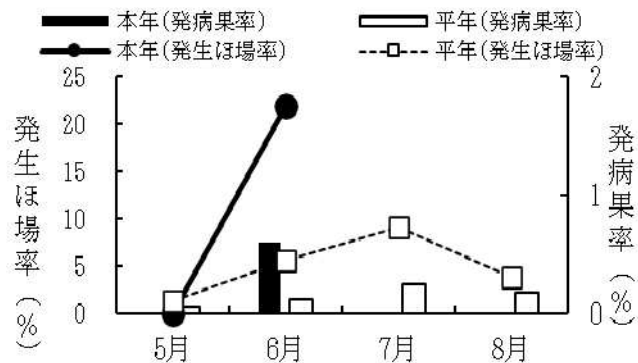
<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	多	やや多
発生ほ場率	17%（平成5%）：高い	22%（平成6%）：高い
発病率	0.5%（平成0.1%）：高い	0.6%（平成0.1%）：高い
春葉および果実共に発生程度は低い（－）		



そうか病の発生ほ場率と発病葉率
(県本土・熊毛)



そうか病の発生ほ場率と発病果率
(県本土・熊毛)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	0%（平成3%）：並	0%（平成6%）：やや低い
発病率	0%（平成0.04%）：並	0%（平成0.06%）：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染した後では防除効果が落ちるので、予防散布に努める。

(イ) 発病葉、発病果は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） やや多

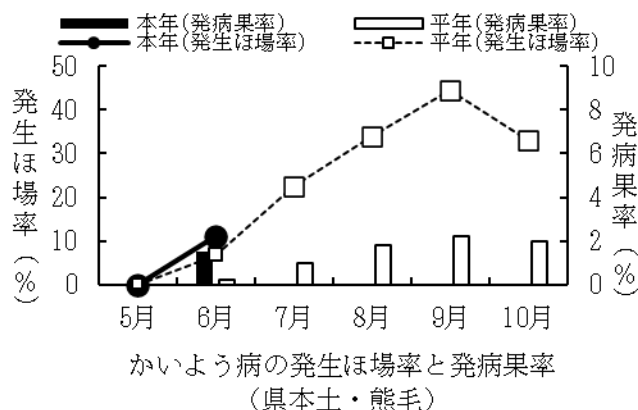
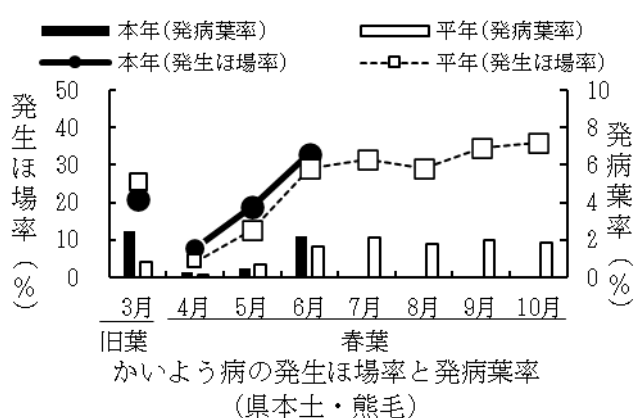
奄美地域（果実） 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発 生 量	並	やや多
発生ほ場率	33% (平年 29%) : 並	11% (平年 7%) : やや高い
発 病 率	2.2% (平年 1.5%) : やや高い	1.5% (平年 0.2%) : 高い



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発 生 量	並	並
発生ほ場率	14% (平年 11%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0.1% (平年 0.1%) : 並	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風網の設置や防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

県本土・熊毛地域 並

奄 美 地 域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : やや少

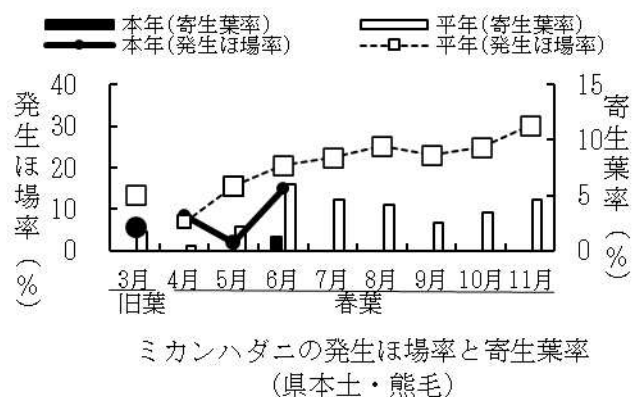
発生ほ場率 15% (平年 21%) : やや低い

寄生葉率 1.2% (平年 6%) : 低い

(イ) 気象予報

気 温 : 高い (+)

降水量 : 平年並みかやや少ない (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 並
発生ほ場率 0 % (平年 1 %) : 並
寄生葉率 0 % (平年 0.04 %) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1 葉当たり雌成虫数 0.5~1.0 頭 (寄生葉率で 30~40 %) を目安に防除する。
(イ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。

イ 薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 成虫は7月中旬まで発生し8月まで産卵するので、成虫の活動が緩慢な朝夕の時間帯に捕殺する。また、卵の圧殺・幼虫の刺殺に努める。

イ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

ウ 主幹の地際部を産卵期前までに土のう袋や防風ネット等で包み込むことで、物理的に遮断(ストックカバー法)し、成虫の産卵を防止する。

ゴマダラカミキリの発育ステージと防除方法

時 期	5 月			6 月			7 月			8 月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生 態			←	成虫発生期	→	→	→	産卵期	→	→	→	→
					←	←	←	幼虫食入期	→	→	→	→
物理的 防除法			←	成虫の捕殺	→	→	→	卵の圧殺・幼虫の捕殺	→	→	→	→
化学的 防除法			←	農薬散布	→	→	→	→	→	→	→	→

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 予察灯における6月のツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシの誘殺虫数は出水市, いちき串木野市及び鹿屋市, 南さつま市ともに増加せず, 平年より少ない。出水市では5月第4半旬に両種の誘殺虫数が一時的に増加したがその後減少し, その他の調査地域では4月以降, 平年並か少なく推移している。各予察灯での最新の誘殺虫数は, 鹿児島県病虫害防除所ホームページを参照。

果樹カメムシ類の予察灯での誘殺数

ツヤアオカメムシ

チャバネアオカメムシ

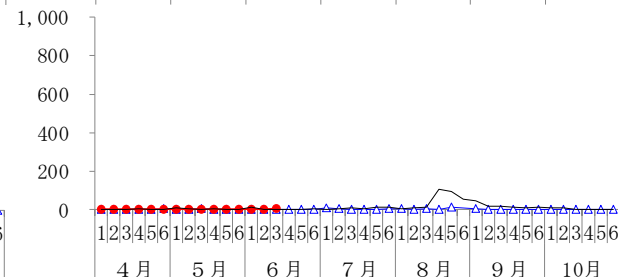
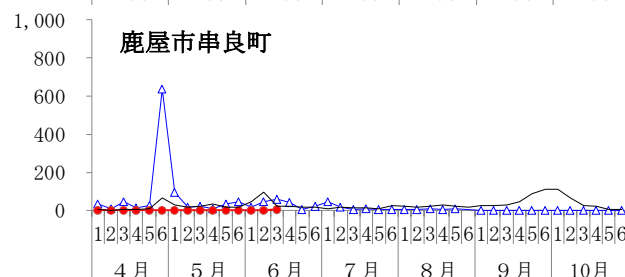
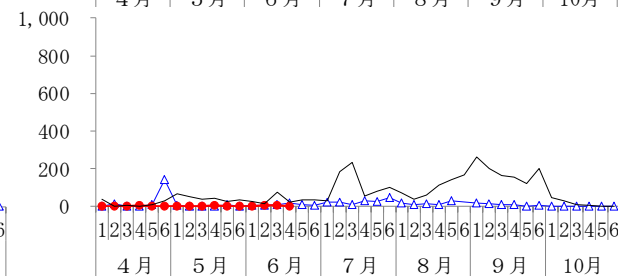
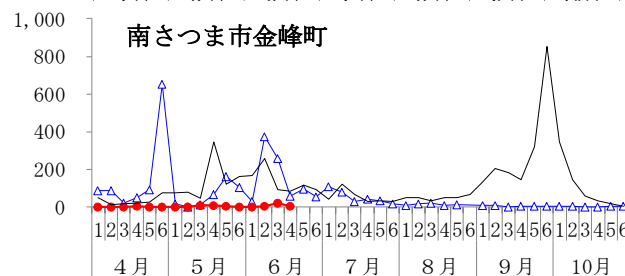
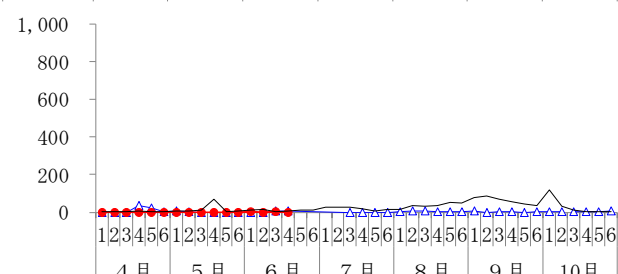
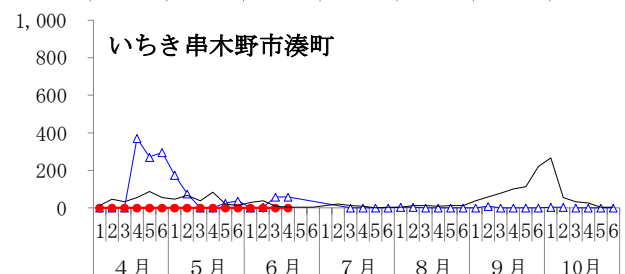
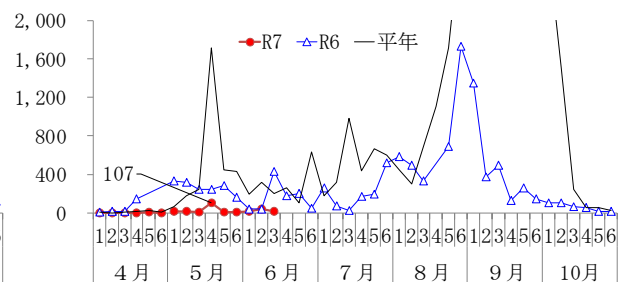
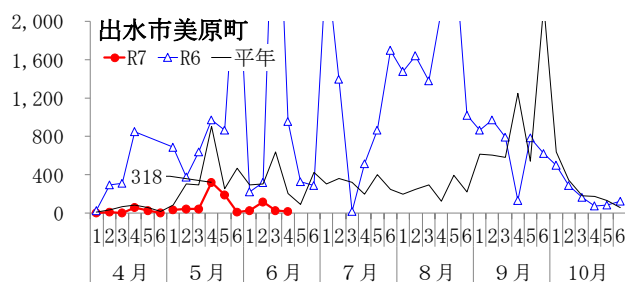


図 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注1) 平年は過去10年間の平均値。捕虫方法は南さつま市金峰町100w水銀灯，鹿屋市は捕虫用蛍光灯と白色蛍光灯（20W）を併設，他は40W捕虫灯。

イ 餌植物（ヒノキ）球果の県本土の着果量は，球果量指数36（平年47）で平年と比べて少ない。地域別では南薩，大隅は並，北薩，始良はやや少である。今後，新成虫が急激に増加する可能性は低いと考えられるが，着果数が少ない地域では寄主植物から離脱する時期は早い傾向があるので注意する。

表 餌植物（ヒノキ）の球果量指数

調査地域	本年（平年比）	前年(R6)	平年
南薩	33（並）	43	41
北薩	37（やや少）	75	51
始良	40（やや少）	73	52
大隅	36（並）	46	40
平均	36（やや少）	60	47

注1) 球果量は目視による達観調査（57地点），評価は7段階

2) 球果量指数は愛媛県（2018）による。

3) 球果量指数： $((\text{極多地点数} \times 7) + (\text{多地点数} \times 6) + (\text{やや多地点数} \times 5) + (\text{中地点数} \times 4) + (\text{やや少地点数} \times 3) + (\text{少地点数} \times 2) + (\text{極少地点数} \times 1)) / (\text{総地点数} \times 7) \times 100$

4) 平年は2015～2024年の10年平均，（ ）は平年比

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

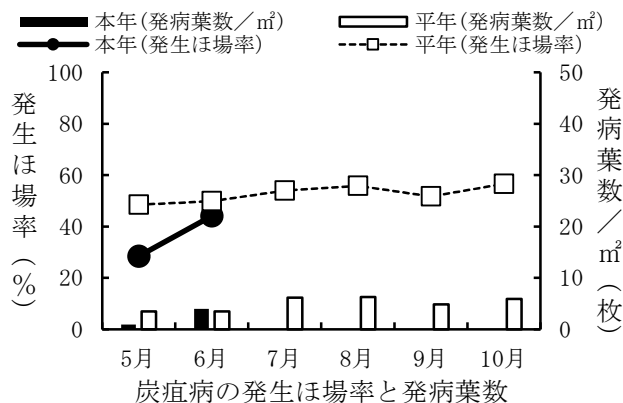
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 44% (平年 50%)

1 m²当り病葉 4.0 枚 (平年 3.5 枚)

：並



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) やぶきた, おくみどり等の本病に弱い品種や多発ほ場では, 萌芽～1葉期に予防散布を行う。

(イ) 三番茶期は萌芽から摘採までの期間が短いので, 農薬の使用時期(摘採前日数)を厳守する。

(ウ) 更新園では, 裾部に残った病葉が伝染源となり再生芽へ感染するため, 1～3葉期に予防効果のある農薬で防除する。

(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

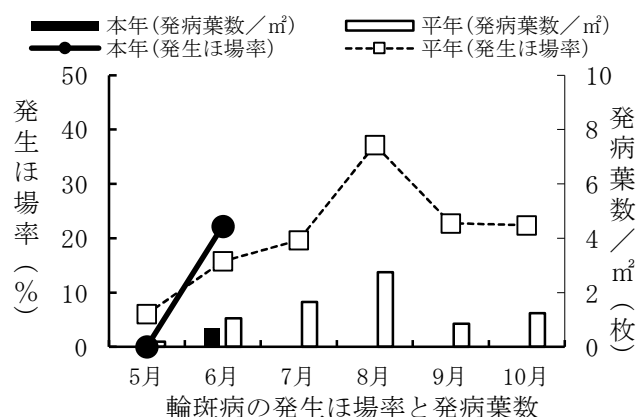
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 22% (平年 16%) : やや多

1 m²当り病葉数 0.7 枚 (1.1 枚) : 並



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 農薬の使用時期は, 保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に, 浸透移行性の農薬を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(イ) 本病に弱い品種^{注)}では, 更新園においても再生芽の整枝直後に農薬散布を行う。

注) 弱: やぶきた, おくゆたか, さえみどり, はるみどり, やや弱: あさつゆ

(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

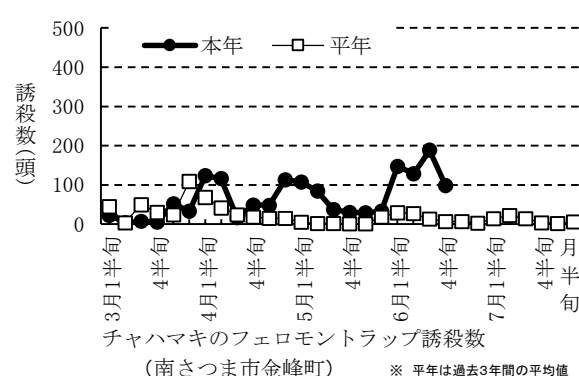
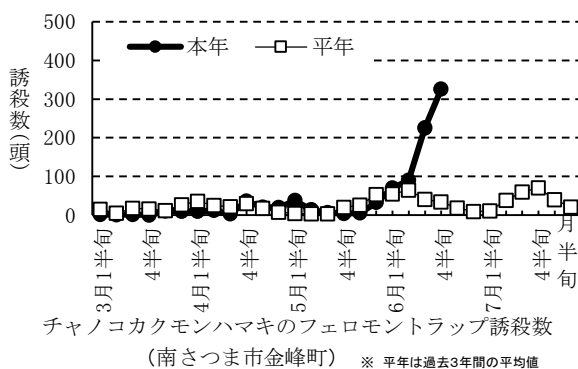
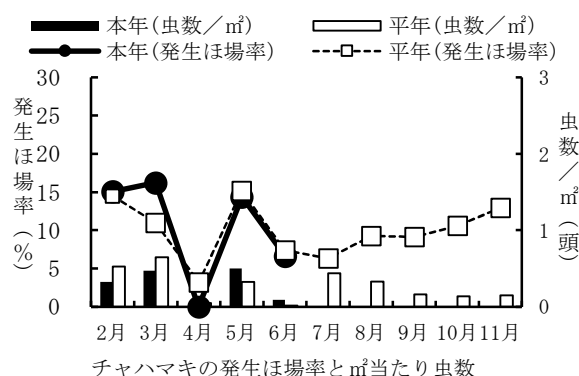
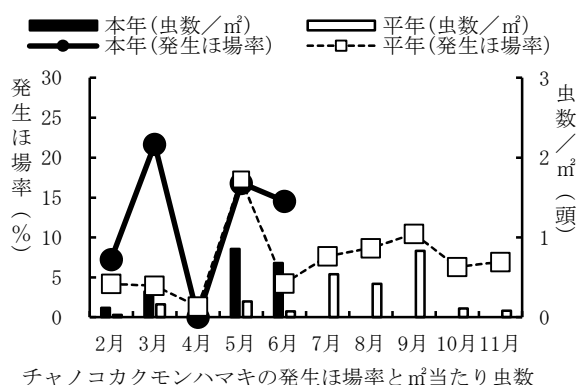
(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 多
 チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	多	並
発生ほ場率	15% (平年4%) : 高い	7% (平年7%) : 並
m ² あたり虫数	0.7頭 (平年0.1頭) : 多	0.10頭 (平年0.02頭) : 多
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数* (3月1半旬~6月4半旬)	940頭 (平年530頭)	1,469頭 (平年540頭)

* 平年は過去3年間の平均値



(イ) 気象予報

気温 : 高い (+)

降水量 : 平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。

(イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。

(ウ) 一部でジアミド系農薬に対する感受性が低下しているので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

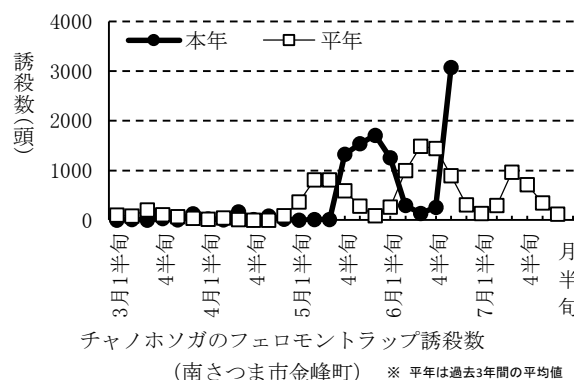
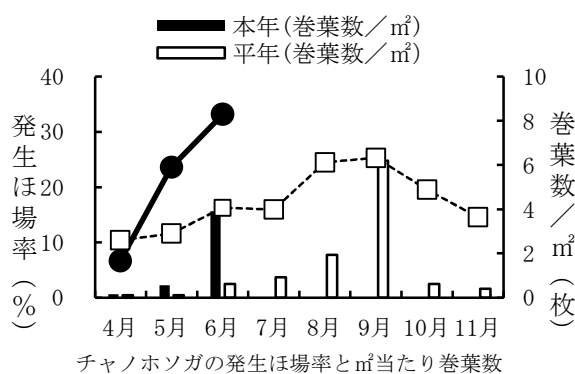
【巡回調査】

発生ほ場率 33% (平年 16%) : 高い

m²当たり巻葉数 3.9 枚 (平年 0.6 枚) : 多

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数 (3月1半旬~6月4半旬) 10,069 頭 (平年 7,973 頭) * 平年は過去3年間の平均値



(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 三番茶期の萌芽～1葉期に防除を行う。

(イ) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）に注意する。

(ウ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

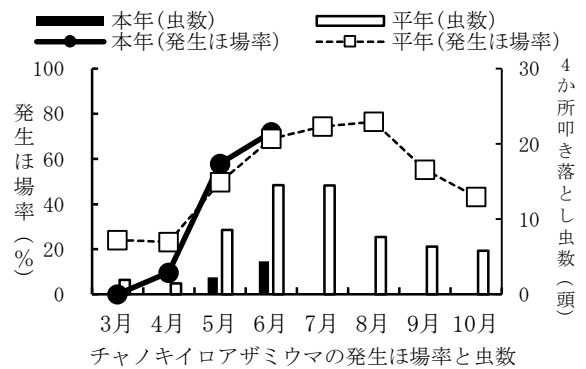
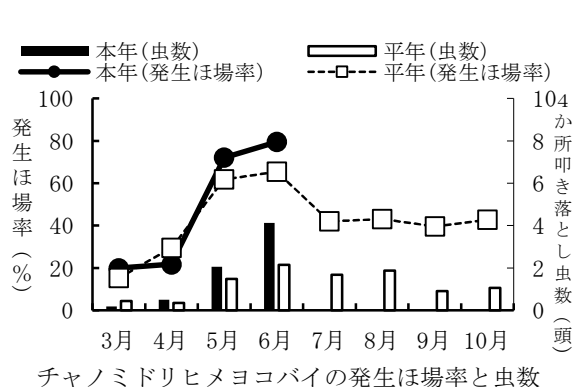
(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量
チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

【巡回調査】	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	並
発生ほ場率	80% (平年 65%) : やや高い	72% (平年 69%) : 並
虫数 (4 か所たたき落とし)	4.1 頭 (平年 2.1 頭) : 多	4.4 頭 (平年 14.5 頭) : 少
発生程度	高いほ場を認める (+)	—



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、栽培の多様化により、同一地域でも芽の生育時期や防除時期が園地により異なる。このため、農薬散布において隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意する必要がある。具体的に以下の事項を遵守する。

- (1) 農薬を散布する際は、摘採前日数を遵守する。
- (2) 隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意する。
- (3) 摘採前であることを「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ、炭疽病、輪斑病、新梢枯死症等）は適切に行う。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は，住宅地及び畜舎に隣接するほ場や，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。